

ゾンカ語の音声特徴と音素設定

鈴木 博之

1 はじめに

本稿では、ゾンカ語の音声の精密な観察に基づき、チベット語諸方言の先行研究に言及しつつ従来の音素体系について問題点を指摘し、音素設定を試みることを目的とする。

1.1 ゾンカ語概観

ゾンカ語はチベット・ビルマ語派、チベット語群に属する言語で、ブータン王国の国語である。ゾンカ語は系統的に見ても広義のチベット語南部方言に含まれ、そのように考える先行研究もある (Häsler (1999)、江荻 (2002) など)。この言語は主にブータン西部の Ha 方言を中心に整備されたものであり、いくぶん人工的である。

今回の議論のもとにあるゾンカ語の音素についての問題点は、チベット語から見てかなり複雑な体系を認めていることにある。この点について長野 (1989) は、音素を確定するためにはゾンカ語の音声的特徴をとらえる必要性を示唆している。声調とからめて議論すれば、より単純化できる可能性もある一方、それぞれの音声の特質を生かした、チベット語とは異なる系列を見出すこともできる。このような議論を行うためには、ゾンカ語の精緻な音声記述を行うことが何よりも先に行われなければならないと考えられる。

現在のところゾンカ語に関する最も詳細な文献は、CD も付属している van Driem (1998) である。この文献は教育目的のためか、音声・音韻について発音上の音声学的な注意点は詳細な解説があるが、音素の総数については言及していない。Roman Dzongkha¹ による表示がゾンカ語の音素と対応しているというが、それらがすべて実際音素として対立すべき要素であるかどうかは分からない。

van Driem (1998) の音声記述は確かに説明的であり、詳細な IPA 表示を用いているが、それが音声学的に正確を期した記述であると断言はできない。音声資料が付属している以上、その音声を再確認し音声学的にさらに精緻な記述を試みることで、見落とされがちである音声的性質を際立たせ、新たな発見を可能にするということも考えられる。

1.2 本稿の構成

以下の議論における音声資料は、van Driem (1998) に付属の CD および筆者の調査で得たものを用いる。筆者の調査協力者は日本在住のブータン人のキンザン・ドルジ ཀུང་བླ་རྩ་རྟ་ཅེ་རྩ་ (Kung-bzang rDo-rje) さんとリンチェン・ドルジ རིན་ཅེན་རྟ་ཅེ་རྩ་ (Rin-chen rDo-rje) さんである。2 人ともゾンカ語は母語ではなく、学校教育を受けて学んでいるため、ブータン全国で通用する標準的なゾンカ語を使用する。

¹ ゾンカ語の発音に近いようにローマアルファベットを用いた表記法で、1990 年代に考案され公式に制定されたが、それほど普及はしていないようである。

本稿の構成は次の通りである。まず、2節でゾンカ語の先行研究の音素体系2例を挙げる。次に、3節で問題点を他の先行研究とともに指摘し、音声資料に基づき考察を行う。そして4節で筆者の音素設定を示し、最後に5節でそれら音素に対応する具体例を掲げる。

2 先行研究の音素体系

ゾンカ語の音素体系について総合的に言及している先行研究は2通りのものしかない。まずはそれらの全体像を把握するため、以下に示す。

2.1 長野(1989)によるもの

【母音】

i ü u
e ö o
a

【子音】

閉鎖音	無声有気	p ^h	p ^{fh}	t ^h		t ^h	c ^h	k ^h
	無声無気	p	p ^f	t		t	c	k
	有声有気	b ^h	b ^{vh}	d ^h		q ^h	j ^h	g ^h
	有声無気	b	b ^v	d		q	j	g
破擦音	無声有気					ts ^h		
	無声無気					ts		
	有声有気					dz ^h		
	有声無気					dz		
摩擦音	無声			lh		s		ʃ
	有声有気					z ^h		ʒ ^h
	有声無気					z		ʒ
鼻音	有声	m		n			jɳ	ŋ
流音	有声			l		r		
半母音		w					j	

表記上の改変を行い、調音法の記述を加えた。声調は、高、低の2種を認める。

2.2 van Driem (1998) によるもの

以下の音素体系は Roman Dzongkha で書き分けられるすべての要素に相当する。また、江荻(2002)では音素体系として以下のそり舌摩擦音を破擦音に変えて言及している。

声調：高、低、上昇、下降²

【母音】

i, i:, y:
e, e:, ø:
ɛ:
a, a:

u, u:
o, o:

²上昇、下降は高、低に付随して現れ、最小対を構成するというが、ゾンカ語のすべての方言で上昇調および下降調が確認されるわけではない。

【子音】

		両唇	歯	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		t ^h		k ^h	
	無気	p	t		t		k	ʔ
	半有声	b̥	d̥		d̥		g̥	
	完全有声	b	d		d		g	
破擦音	無声有気	ptɕ ^h		ts ^h		tɕ ^h		
	無気	ptɕ		ts		tɕ		
	半有声	b̥d̥ʑ				d̥ʑ		
	完全有声	bdʑ		dz		dʑ		
摩擦音	無声		ʃ	s		ɕ		h
	半有声			ʑ		ʑ		
	完全有声			z		ʒ		
鼻音	有声	m	n			ɲ	ŋ	
流音	有声		l	r				
	無声			ɾ				
半母音		w				j		

3 問題点の指摘と考察

ここでは、以上の音素体系に対する問題点を提示し、音声資料に基づいた考察を加える。例語の表示はチベット文字³、Roman Dzongkha、発音、意味の順とする。

3.1 半有声音

van Driem (1998) は各閉鎖音系列および前部硬口蓋破擦音に、無声有気、無声無気、半有声、完全有声の4種を区別し、対立すると解説している。また、摩擦音でも無声、半有声、有声の3種が区別されている。以下に無声無気と半有声の例を示す。

པཱ་ pā [ˈpɑː] 「絵」
ས་ sa [ˈsɑ] 「地」

བ་ b'a [b̥ɑ] 「牝牛」
ཟ་ z'a [ʑɑ] 「食べる」

van Driem (1998) のいう半有声音は、半分有声ということではなく、かなり無声に近い。同書には無声無気の異音があると記述されており、有声性の低さがうかがえる。

閉鎖音系列および破擦音系列に観察される半有声は、調音開放が有声性の低いもので、開放と同時にしばしば弱い有声声門摩擦音 [ɦ] が連続する。これは中央チベット語 Lhasa 方言における低声調の有気音の帯気 [ʰ] とは異なる。この音自体の音声記述について van Driem (1998) は “breathy” と呼ぶ一方、IPA における無声化の記号 [.] を用いた音声記述にとどめている。一般に “breathy” という名称で呼ばれる場合、インド・アーリア諸語などに見られる有声有気音の有気性について言及されるときである。これとはまったく質的に異なる音である。

³チベット文語とは異なる。よって転写方法も同様にはできないため、本稿では Roman Dzongkha または音韻表記をあわせて記す。

摩擦音のうち *s* 類と *ɕ* 類における半有声の位置づけであるが、無声音を基調とする要素に、徐々に有声性が高まっていくものであり、閉鎖音とは異なる有声性を帯びているといえる。また *s* 類と *ɕ* 類では、van Driem (1998) に同じ半有声という名称で言及されるが有声性の異なりが見られる。前者はかなり無声に近く、有声声門摩擦音が聞こえることは多くない。一方で後者は有声声門摩擦音が聞こえやすいという点で有声性が高くなっているように考えられる。

破擦音系列には *ts* 類と *tɕ* 類、*ptɕ* 類が存在するが、van Driem (1998) は半有声を *ts* 類に認めていない。この理由として、摩擦音の音声的特質が関わっていると考えられる。上述のように、摩擦音 *s* 類と *ɕ* 類の半有声は有声性において異なって実現される。破擦音は調音上、閉鎖の開放と同時に摩擦が生じ、半有声という音声実現に関して有声性は摩擦音について問題となる。ゆえに半有声における *s* 類の有声性の低さは破擦音系列にも影響し、破擦音系列 *ts* 類の半有声が認められていないことも理解できる。実際破擦音系列 *ts* 類の発音では半有声音のみが現れる例は確認できず、明らかに完全無声音と自由変異のように現れることが分かった。

以上のような音声について van Driem (1998) と同様に、記述し音素と認定しているものに黄布凡 他 (1994) のカムチベット語玉樹(雜多) 方言および Causemann (1989) のカムチベット語 Nangchen (囊謙) 方言がある。いずれも中国青海省玉樹藏族自治州で話される方言である⁴。これら以外に半有声音を音素として認めている文献は未見である。ただし特に黄布凡 他 (1994) では音声記述を主体にしているため、必ずしも音素体系に半有声を認めるかどうかはわからない。音声学的に半有声音を認めているものも決して多くないが、Lhasa 方言では北村・長野 (1990) において半有声音を低声調の無気音の音声として記述されている。また筆者が調査を行ったカムチベット語 Derge (徳格) 方言、Lhagang (塔公) 方言、Sereshul (石渠) 方言、Chaphreng (郷城) 方言のいずれにも閉鎖音・破擦音の半有声音を確認した。音質的にはゾンカ語によく似てはいるが、ゾンカ語ほど [a] が明瞭に後続することはなく、少しの有声性が付随しているといえる。これらは格桑居冕・格桑央京 (2002) など先行研究と見比べると、無声無気に属している。

以上の考察から、音素としてはこれまでの記述における無気無声と半有声を 1 つとする。しかし実際半有声音は存在するため、それを表すには声調を加味して「/音素/ <高 | 低>」と書けば、/p/ <p|b>, /t/ <t|d>, /tʰ/ <tʰ|dʰ>, /k/ <k|g>, /tɕ/ <tɕ|dʑ>, /s/ <s|z>, /ɕ/ <ɕ|ʑ> と示すことができるだろう。こうすると、実際 /ts/ <ts|ts> となっていることは音素表に現れず、van Driem (1998) のものより体系的に考えられるといえる。

また、以上のような声調の対立でペアをなすが、調音法が有声性のみで対立していない <ʔ|ɦ> は別項で扱う。

3.2 両唇音と前部硬口蓋破擦音の連続

両唇音と前部硬口蓋破擦音はそれぞれ単独で音素として認められる。しかし記法上も発音上も両唇音と前部硬口蓋破擦音が連続する *ptɕ* のような音声が存在する。これが van Driem (1998) の音素にあるように、*ptɕ* 類を 1 個の破擦音素とすべきか、「両唇音 + 前部硬

⁴黄布凡 他 (1994) では、ここでの半有声のことを「有声気音を伴う無声子音」と説明し、「半有声とも呼べる」と言及している。

口蓋破擦音」と解釈すべきか議論する余地はあるだろう⁵。

ptɕ 類は、実際の発音では先行する両唇音が脱落する可能性がある。以下に例を掲げる。

ṣṣ pɕa [ʔ(p)ʔɕa] 「猿」

ṣṣ bjam [b'dʒa:m] 「飛ぶ昆虫」

ṣṣ pcham [ʔ(p)ʔɕʰa:m] 「ほうき」

ṣṣ bj'a [(b/p)ʔɕʰa] 「鳥」

先ほどの考察を踏まえた場合、無気音に相当するものでしばしば先行する両唇音の脱落が確認される。また、無声有気、有声の場合にはほとんど保存される両唇音も、発音方法は調音無開放である。脱落の頻度から、自由異音と考えると差し支えないかもしれない。そう考えると前部硬口蓋破擦音と同じになることになる。しかし ptɕ 類の破擦音は調音点がやや前寄りになるほか、破擦音部の閉鎖が短く、区別に困難さは感じられない。筆者自身の調査で丁寧に発音してもらった場合に脱落することは少なかったが、通常の発話速度の場合は脱落が確認された。また、先ほどの破擦音についての考察と照らすと、両唇音の有無によらず有声性は破擦音の摩擦音要素のかかわりが大きい。

3.3 そり舌音の音質

そり舌音の調音点は後部歯茎周辺である⁶。van Driem (1998) はそり舌音を閉鎖音であると記述しているが、江荻 (2002) はこれを破擦音であると訂正している。しかし筆者は van Driem (1998) の録音や調査によって、ほとんどの場合で閉鎖音であることを確認した。

ただし異音という観点から見れば、無声有気音の異音には破擦性のあるものが確認された。これは破擦音とは異なるものである。加えて、多く完全有声の異音に [dɕ] が確認される。調音位置は後部歯茎で、舌尖をそらさずに閉鎖を作り、開放した後に r 音を出す。破擦音化は全く起こさない。

いずれにしても、江荻 (2002) の主張するようにゾンカ語のそり舌音は破擦音と認定するには根拠に欠けており、本稿では閉鎖音と考える。

3.4 高声調の共鳴音

van Driem (1998) によると、ほとんどの共鳴音には声調のみによる対立の形成が記述されている。しかしよく音声を観察すると、声調の違いと同時に高声調の場合はほとんどの例で初頭子音の前に軽い声門閉鎖音をもつことが確認された。このとき、鼻音の調音維持時間に差が生まれ、声門閉鎖音を持つときは概して短くなる。このような現象に関する言及は同書にはなされていない。

共鳴音の前に声門閉鎖音を伴うことはあまり先行研究でも報告されていない。しかし半有声の音素認定と共通して Causemann (1989) と黄布凡 他 (1994) には、以上の共鳴音に先行する声門閉鎖音を音韻体系の一部に認めている。前者はその実際の音声についても言及し、「前声門化音」と呼んでいる。また、歴史的観点からではあるが、江荻 (2002) も鼻音の直前に声門閉鎖音が現れることを認めている。

以上のことから筆者はゾンカ語におけるこれら共鳴音の前に声門閉鎖音を伴うものを子音連続と考えることにする。そのため、ここで音素 /ʔ/ を確定したい。

⁵ 長野 (1989) では p^f 系列の閉鎖音に分類されているものに相当すると考えられる。しかし少なくとも筆者の確認しえた限りの音声に [p^f] で実現される例は見当たらない。

⁶ そり舌音は舌裏で調音するものの総称であり、調音点は言語によって後部歯茎周辺から前部硬口蓋周辺まで多岐に渡る。

3.5 音節初頭母音の扱い

語の初頭が母音始まりであるかどうかは、ゾンカ語の音節構造をどう考えるかということと密接に関連している。音節構造については、Lhasa 方言の場合でも研究者によって立場が異なり、母音始まりを認定するかどうかは問題になる。

大きく関わっているのが、<ʔ|ɦ>というペアをなす音声である。問題の争点として、これらで始まるものは常に声調によって現れるものが決まっている条件異音と考えられるため、声調を認めるならばこれらの音素は記述上不要と考えられることがある。van Driem (1998) は、母音始まりの語に声調による対立があると述べている。その差はつづり字によっても区別されており、ཨ་(‘) は低声調、ཨྀ(ā) は高声調に対応する。

語頭の例は次のようである。

ཨམ་ am [ɦim] 「ジャツカル」

ཨ་པ་ ‘apa [ʔa pa] 「父」

ཨྀ་ཟེ་ öz ‘e [ɦø: zE] 「輝いている」

ཨྀ་ལོ་ öko [ʔø: ko] 「首」

以上の例を見る限り、音声的に初頭が母音で始まっているものは見受けられないと考えられる。ところが van Driem (1998) では以上のように明確につづり字上で現れるもののほかに、次のように Roman Dzongkha では母音始まりの語が見られる。

ཡུ་ ü [jy:] 「王国」

གཡུ་ ‘ü [ʔy:] 「村」

しかし音声実現としては半母音を伴っていると考えられるため、純粹に母音で始まっているとはいえない。また音質については、<ʔ|ɦ>が確かに声調の違いを反映していることが分かる。先述の考察とあわせ、/ʔ/ <ʔ|ɦ>を認めたい。

このような場合、語の初頭において母音始まりを認めない構造と考える方が現実 to 適合しているといえる。

3.6 末子音の扱いと二重母音

末子音は van Driem (1998) によれば、初頭子音に認められる音素のうち、m, n, ŋ, p, k, ɣ, l, r が見られる。このうち p, k は無開放で発音される。

ここで問題にしたいのは、特に動詞の活用に見ることが多い、第2要素に Roman Dzongkha で u と表記される母音連続をどのように考えるかである。実際の音声を確認した場合、この場合 u と表記されているものは単独の場合の u 音 [u, ʊ] に比べてはるかに母音的性質が弱くなっていることが分かる。協力者にゆっくりと発音してもらったが、これは先行する母音と二重母音を形成しているようには見受けられなかった。むしろ半母音的性質を帯びているといえ、[w, u^w] という表記が的確であろうと思われる。よって初頭子音に認められる/w/を末子音にも認めることができると考えたい。

以上のように考えると、roman Dzongkha で二重母音はごくわずかに ཨྲི་ ‘ai [ʔAfi:] 「母」などが見られるのみとなる。しかしこの場合、音声的に単なる母音連続ではなく弱い [ɦ] が現れることに注目できる。これを本稿では二重母音とみなさず、2音節に分離する扱いとする。

先述の末子音の-w を認めた場合、以上でゾンカ語の二重母音は認められない⁷。

⁷ 間投詞で見受けられる二重母音があるが、これは除外する。

3.7 声調の認定

van Driem (1998) は基本的な声調として、高、低の2種を認め、その上に上昇、下降がそれぞれに加わり、4つの声調の存在に言及している。しかし同書では4声調の区別は非常に困難なため、高、低の区別を重点において解説を加えてある。

van Driem (1998) に付属の録音で確かめた場合、わずかながら異なりが確認された。ただし同一語の他の録音箇所の音声と対照した場合、必ずしも明確に声調の一致が確認できない。筆者の協力者に確認したところ、それぞれ母音の長さや末子音を読むなど、統一的な発音が聞かれず、おおそ地域差、方言において声調に反映されるか音質に反映されるかが異なり、さらに話者によって違いが見られると考えられる。なお、カムチベット語 Derge 方言では高、低、上昇、下降の4声調が確認されるが、Häsler (1999) では弁別的なのは高低の2種であると述べている。

ここではゾンカ語の声調として高、低の2種のみを認めておく。

4 改訂したゾンカ語の音素設定

声調：高（^hで示す）、低

【母音】

i, i:, y:	u, u:
e, e:, ø:	o, o:
ɛ:	
a, a:	

【子音】

		両唇	歯	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		t ^h		k ^h	
	無気	p	t		t		k	ʔ
	完全有気	b	d		d		g	
破擦音	無声有気			ts ^h		tɕ ^h		
	無気			ts		tɕ		
	完全有気			dz		dʒ		
摩擦音	非有気		ɬ	s		ɕ		h
	完全有気			z		ʒ		
鼻音	有気	m	n			ɲ	ŋ	
流音	有気		l	r				
	無声			ɭ				
半母音		w				j		

注⁸

【複子音】

ptɕ^h, ptɕ, bdʒ, ʔm, ʔn, ʔɲ, ʔŋ, ʔl, ʔw, ʔj

⁸厳密に言えば、/m/, /l/, /ɭ/は歯茎音である。ここでは、調音の舌尖性を考慮して歯音のグループに入れた。

5 音素の具体例

ここでは上記で認定した音素について具体例を示す。例はゾンカ語蔵文、音素表記、代表音による発音表記、意味の順に記す。

5.1 初頭子音

p ^h	ཕགཔ་	ˈpʰap [ˈpʰapʰ]	ぶた	འཕོལ་	ˈpʰow [ˈpʰou]	胃
p	高	པར་	絵	སུ་	ˈpu [ˈpu]	毛
	低	བ་	牝牛	བུ་	pu [bʱu]	息子
b		འབར་	目標	སྤྲུམ་	bo:m [bo:m]	大きい
t ^h		མཐོ་དྲག་	高価な	མཐོང་	ˈtʰoŋ [ˈtʰoŋ]	見る
t	高	ཕྱོ་ཚང་	友人	ཉིག་རུབ་	ˈti ru [ˈti ru]	お金
	低	རོང་	穴	རུག་	tu: [d̪u:]	毒
d		གདོང་	顔	དདུན་	dyn [dyn]	7
t ^h		ཁྱག་	血	འཕྲོད་	ˈtʰø: [ˈtʰø:]	尽くす
t	高	སྤྱད་	手渡す	བཀྲ་ཤིས་	ˈtʰa ɕi [ˈtʰa ɕi]	吉祥
	低	རྩོད་	暖かさ	ག་	tu [d̪u]	ポート
d		བཞེས་པ་	以前の	ཐོ་	dø [d̪ø]	羽
k ^h		ཁ་	口	ཁལ་	ˈkʰaw [ˈkʰau]	雪
k	高	ཀལ་	柱	དཀར་པོ་	ˈka:p [ˈka:pʰ]	白い
	低	གཙུག་	何	གུར་	ku: [g̪u:]	テント
g		དགའ་	愛する	གོ་	go [go]	扉
ts ^h		ཚུ་	塩	ཚང་	ˈtsʰaŋ [ˈtsʰaŋ]	巢
ts		ཙལ་	草	བཙོག་པ་	ˈtsop [ˈtsopʰ]	汚い
dz		ཇམ་	つぼ	ཇོང་	dzong [dzong]	県
tɕ ^h		འཕྱུ་	群がる	ཆར་པ་	ˈtɕʰa:p [ˈtɕʰa:pʰ]	雨
tɕ	高	ཕྱ་	髪	ཕྱགས་	ˈtɕa: [ˈtɕa:]	鉄
	低	བྱས་སུ་	慈悲	ཇ་	tɕa [d̪ɕa]	茶
dz		ཇུ་	財産	དཇེད་	dze: [dze:]	忘れる
t		ཧ་	神	ཧམ་	ˈtʰam [ˈtʰam]	靴
s	高	ས་	地	གསེར་	ˈse: [ˈse:]	金
	低	ཟ་	食べる	ཟས་	sam [sʰam]	橋
z		གཟུགས་	体	གཟི་	zi [zi]	縞瑪瑙
ɕ	高	ཤིང་	木	གཤོང་	ˈɕoŋ [ˈɕoŋ]	谷
	低	ཞུས་	帽子	ཞིང་	ɕiŋ [ʰɕiŋ]	野原
ʒ		གཞུ་	弓	གཞོན་མ་	ʒø:m [ʒø:m]	若い
h		ཧང་	枕	ཧིང་	ˈhiŋ [ˈhiŋ]	心
ʔ	高	ཨ་ར་མ་	唐辛子	ཨ་ཞི་	ˈʔa ʒi [ˈʔa ʒi]	王女
	低	འོང་མ་	来る	འུབ་	ʔu:p [ʔu:pʰ]	ふくろう

m	མར་	ma: [ma:]	バター	མར་ཁུ་	ma: k ^h u [ma: k ^h u]	油
n	ནས་	na: [na:]	大麦	ནོར་	no: [no:]	家畜
ɳ	ཉིམ་	ɳim [ɳim]	太陽	ཉི་ཤུ་	ɳi ɕu [ɳi ɕu]	20
ŋ	ངོ་ཤེས་	ŋo ɕe: [ŋo ɕe:]	分かる	ངག་	ŋag [ŋak]	話
l	ལོ་	lo [lo]	年	ལུག་	lu: [lu:]	羊
r	ར་	ra [ɹa]	ヤギ	རི་	ri [ɹ ^ʰ i]	山
ɾ	རྩེལ་པོ་	ɾi:p [ɾ ^ʰ i:p]	全体の	རྩེལ་	ɾɕe: [ɾ ^ʰ ɕe:]	裂く
w	ཡ་	wa [wa]	浴槽			
j	ཡིག་ཚང་	ji ts ^h a [ji ts ^h a]	事務所	ཡུམ་	jum [jum]	母（敬語）

5.2 複子音

pɕ ^h	ཕུགས་	ɔ̃ptɕ ^h a:m [ɔ̃p ^ʰ ɕ ^h a:m]	ほうき	ཕུ་	ɔ̃ptɕ ^h i [ɔ̃p ^ʰ ɕ ^h i]	小麦粉
pɕ	高 ཕུ་	ɔ̃ptɕa [ɔ̃(p ^ʰ)ɕa]	猿	ཕུན་	ɔ̃ptɕiŋ [ɔ̃(p ^ʰ)ɕiŋ]	のり
	低 ཐུ་	ptɕa [(b ^ʰ)dʑ ^h ɿa]	鳥	ཐུམ་	ptɕim [(b ^ʰ)dʑ ^h ɿim]	砂
bʑ	ཐུང་	bdʑaŋ [b ^ʰ dʑaŋ]	蜂蜜	ཐུངས་	bdʑa:m [b ^ʰ dʑa:m]	飛ぶ昆虫
ʔm	མེལ་	ɔ̃ʔmap [ɔ̃ʔmap]	夫	མིག་རྩ་	ɔ̃ʔmi to [ɔ̃ʔmi t̚o]	目
ʔn	ནག་	ɔ̃ʔna: [ɔ̃ʔna:]	膿	གནས་	ɔ̃ʔnam [ɔ̃ʔnam]	天
ʔɳ	གཉིས་	ɔ̃ʔɳi: [ɔ̃ʔɳi:]	2	ཐུ་གུ་	ɔ̃ʔɳu ku [ɔ̃ʔɳu ɡɿu]	ペン
ʔŋ	གཏུལ་	ɔ̃ʔŋy: [ɔ̃ʔŋy:]	銀	ཐུ་	ɔ̃ʔŋa [ɔ̃ʔŋa]	5
ʔl	ཁྲོ་	ɔ̃ʔlo [ɔ̃ʔlo]	精神	ཁྲོལ་གུ་	ɔ̃ʔlop [a [ɔ̃ʔlop ^ʰ d̚a]	学校
ʔw	དབང་	ɔ̃ʔwaŋ [ɔ̃ʔwaŋ]	精神力			
ʔj	གཡལ་ག་	ɔ̃ʔja: [ɔ̃ʔja:]	ヤク	གཡུ་	ɔ̃ʔju [ɔ̃ʔjɥ]	トルコ石

5.3 母音

i	ཇི་	ki [ki]	平和	ཇེ་མིག་	di mi [di mi]	鍵
e	མེན་	menj [menj]	名前	ཀེལ་	ˈkep [ˈkep]	腰
a	ཇེ་	tɕa [dʑ ^h ɿa]	茶	ཀམ་	ˈkam [ˈkam]	乾いた
o	དོ་	do [do]	石	གོལ་པ་	gop [gop]	玉ねぎ
u	ཐུ་	ɔ̃ʔlu [ɔ̃ʔlu]	歌	ཐུ་	ɔ̃ɕ ^h u [ɔ̃ɕ ^h u]	水
i:	ཇུའི་	dzi: [dzi:]	重量	བསིལ་	ˈsi: [ˈsi:]	寒い
e:	ཇུའེ་	te:m [te:m]	祭り	ཐུང་	ɔ̃ptɕ ^h e: [ɔ̃p ^ʰ ɕ ^h e:]	半分
ɛ:	གཅུང་	gɛ: [gɛ:]	8	སུས་	ˈse: [ˈse:]	王子
a:	མངར་མོ་	ɔ̃ʔja:m [ɔ̃ʔja:m]	甘い	ཏུ་སག་	ˈha: sa [ˈha: sa]	早い
o:	ཚལ་	ɔ̃ts ^h o: [ɔ̃ts ^h o:]	甥	སོ་གཅིག་	ˈso: tɕi [ˈso: tɕi]	30
u:	འབྲུག་	qu: [qu:]	龍	ཐུག་	su: [sɥ:]	痛み
ø:	ཚོང་འབྲུ་	ts ^h ø: se [ts ^h ø: se]	野菜	པོད་པ་	pø:p [bø:p]	チベット人
y:	འབྲུན་མོ་	tsy:m [tsy:m]	女王	ཁྲུས་ཁང་	ɔ̃ɕ ^h y: k ^h a [ɔ̃ɕ ^h y: k ^h a]	風呂場

6 まとめ

本稿では、ゾンカ語の音素体系について従来の見方を改め、再整理を行った。具体的には半有声音と無声無気音を音素として統一し声調による条件異音と考えたこと、標準的なゾンカ語の声調は高、低の2種を認めるということ、「両唇閉鎖音+前部硬口蓋破擦音」および「声門閉鎖音+共鳴音」という子音連続を認めたことが挙げられる。その根拠には、筆者が聞くことのできたチベット語の諸方言における音質の対照と先行研究の記述の検討にあることが大きい。

また、今回の結果から長野(1989)にあるような「ゾンカ語の音素体系を Lhasa 方言のように整理できる」という可能性は否定的なものになったと思われる。Lhasa 方言の体系では、閉鎖音、破擦音の音素は有気、無気の2系列として考えられている⁹。この体系は以上に行った音声記述とそぐわないものになる。むしろゾンカ語はカムチベット語の体系に近いものであることが言える。

今後、ゾンカ語の諸方言を調査、記述できれば、今回の考察で整理した音素体系がチベット諸語の共時的な方言分布においても通時的な音体系の変遷においてもどのような位置を占めるのか、江荻(2002)などの議論から発展させて考えることができるだろう。

参考文献

- 北村甫・長野泰彦(1990)『現代チベット語分類辞典』汲古書院
星実千代(1991)『エクスプレス チベット語』白水社
長野泰彦(1989)「ゾンカ語」『言語学大辞典 第2巻』524-525 三省堂
Causemann, Margret (1989) *Dialekt und Erzählungen der Nangchenpas*; VGH Wissenschaftsverlag
van Driem, George (1998) *Dzongkha*; Research School CNWS
Häsler, Katrin Louise (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege ཇེ་དགེ་ (Sde dge) Dialect*; Selbstverlag
黄布凡 [Huang, Bufan] 他(1994)〈玉樹藏語的語音特點和歷史演變規律〉《中国藏學 第2期》111-134
江荻 [Jiang, Di] (2002)《藏語語音史研究》民族出版社
格桑居冕・格桑央京 [sKal-bzang 'Gyur-med & sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

⁹星(1991)では有気、無気、前鼻音つき有声の3系列を認めているが、音節初頭で前鼻音がない完全な有声音のみは現れず、音声的な意味でゾンカ語と同一の有声音系列を有していることにはならない。